

☆復活節第5主日(5月10日)の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (使徒たちの宣教 6章1～7節)

そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」

一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、アンティオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、使徒たちの前に立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った。

第二朗読 (ペトロの手紙Ⅰ 2章4～9節)

この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。聖書にこう書いてあるからです。

「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、シオンに置く。これを信じる者は、決して失望することはない。」

従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては、「家を建てる者の捨てた石、が隅の親石となった」のであり、また、「つまずきの石、妨げの岩」なのです。

彼らは御言葉を信じないのでつまづくのですが、実は、そうなるように以前から定められているのです。しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。

福音朗読 (ヨハネによる福音書 14章 1～12節)

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」トマスが言った。

「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。

どうして、その道を知ることができるでしょうか。」イエスは言われた。

「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知るようになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」

フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、イエスは言われた。

「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。はっきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。」

朗読解説 ー主任司祭より皆様へー

マリア様の月、五月になりました。色とりどりの草花があちこちに咲いていて、神様の創造のすばらしさが実感できる季節です。新型コロナの影響で以前のようにどこかに出かけて行って喜び合うことができないのは残念ですね。さて、5月10日(日)は復活節第五の主日です。教会でのミサが行われなくなって一か月以上になりますが、忘れないようにしましょう。ちなみに、24日(日)が主の昇天の祭日、31日(日)が聖霊降臨の祭日です。第五主日のミサの朗読は引き続き、使徒たちの宣教と使徒ペトロの手紙、そして使徒ヨハネによる福音が読まれます。

第一朗読 (使徒たちの宣教 6章1～7節)

ここでは使徒たちの宣教の努力が実り、「弟子たちの数が増えてきた」ので、それに伴い問題が起こってきたことが記されています。「日々の分配」で「やもめたちが軽んじられていた」のです。でもこの問題に対し使徒たちは敏感に、そして即座に反応し、使徒たちは「分配することから」手を引き、新たにその任に当たる7人を任命したのです。現在の制度の「助祭」に当たるものです。少し前までは「助祭」は司祭になる一歩手前の役割になっていましたが、第二バチカン公会議の典礼改革により、本来の意味が大変よく出ているようになりました。「祈りとみ言葉の奉仕」の増大と「隣人愛の業」の増大をどのように調和させるのかに苦労していた初代教会の人々は問題の解決に真剣に向き合い、立場に、保身に走らず、ユダヤ教の人々におもねった態度を取ったことに関しても、幻の中で「主が選んだ者たちを拒んではならない」と諫められたことも影響していたものと思われます。こうして教会の信徒たちはアンティオキアという町で「キリスト者」と呼ばれるまでになっていきます。

第二朗読 (ペトロの手紙Ⅰ 2章4～9節)

ここでのテーマは「石」です。私たちの信仰はあやふやなものに基づいているのではなく、しっかりとした「石」を土台としていると、使徒ペトロは言っています。その「石」は、信じない人にとっては捨てられた、躓きの、妨げの石、イエス・キリストです。そのイエス・キリストは「私たちを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった」のです。「石」それは「岩」に通じています。イエスはペトロに対しケファ「岩」と名付けられました。そのことも頭の中にあっただのかもしれないですね。きっとペトロも責任を痛感していたのでしょう。現在の教皇様、司教様方のためにも祈りたいと思います。

福音朗読 (ヨハネによる福音書 14章1～12節)

ここではトマスとフィリッポという弟子が登場します。二人とも正直な気持ちをイエスに質問します。これらの質問は単に二人だけの疑問だったわけではないでしょう。代表して質問しているのだと思います。イエスの話される天の国には「あなたたちのための住むところがたくさんある」。それは「わたしのいるところにあなたがたもいる」ようにしたいとのイエスの願いなのです。「私はそこに至るための道であり、真理であり、命である」とおっしゃっています。フィリッポは「こんなに長い間一緒にいるのに・・・」とイエスから叱られますが、これはまた私たちの状態でもあります。長い間信仰生活を送っていても、まだまだイエスの望みにかなうまでの成長を遂げていない私たちへの言葉です。主である神様を直接に見ることはできなくてもイエスを見ることで信じるのが大切で、今の私たちにとってイエスを直接見ることはできなくても、「イエスの業」が私たちの前には提示されていることを認める力が必要だと言っておられるのではないのでしょうか。この新型コロナの感染症の時に当たって、どれだけ多くの医療関係者の方々やその他の援助者が感染者の支援に奮闘されていることか。これを見るだけでもイエスの言われる隣人愛の業、イエスの業が「ある」ことを示しているのではないかと思います。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光